

X 琉球国使節の行列はどのように描かれたか

横山 學

1. はじめに

江戸時代の庶民が「異国」を意識したのは、琉球・朝鮮・オランダからの使節（琉球国使節・朝鮮通信使・阿蘭陀商館使節）等の「行列する姿」を目にしたときであった。渡来時期も頻度や人数も多様であったが、人々は行列する使者たちの衣装に「異国」を見、耳慣れない楽器の音色に「異国」を聴き、携えた珍しい持ち道具から「異国」の生活を想像したのである。

2. どのようなものが描かれたか

「琉球」を主題として描かれたものには、行列絵巻、舞踊図、人物図、地図、琉球物刊行物、絵双六などがある。「行列そのもの」、「使節の姿（舞踊や人物）」、「琉球に寄せられた興味関心に応えるために記されたもの」に分けられる。

賀慶使・恩謝使を勤める琉球国使節の構成は概ね百人未満で、両使節が合わさる場合は人数も倍した。朝鮮通信使の約半数であった。記録に残る呼称は時代によって異なるが、基本的に使者は正使と附役たちと楽人・楽童子らで構成されていた。煌びやかな衣装を纏い、異国の音を響かせて江戸城に向かう大行列であった。宝永7年（1710）度からは使者の名称、使者の手にする諸道具が定まり、以後は継承される。この時期から、互いの行列の構成を似せた朝鮮通信使と琉球国使節が、「国王からの使節」としての役割を担うことになった。すなわち、「それぞれの国の儀装と装束」、「楽隊」を伴い、朝鮮国王や琉球国王からの「書簡を守護した使者（正使・副使）」が従者たちを引き連れて行進するのである。従者の捧げる「龍旗」は朝鮮、「虎旗」は琉球。通信使の従える女性と見紛う美少年たちは「小童」、琉球使節は「楽童子」であった。幕府にとって両国の政治的位置づけは異なったが、行列を見物する人々には、等しく「幕府に朝貢する異国の使節」であった。江戸に向かう朝鮮通信使の行列は、宝暦14年（1764）が最後となり、その後の行列は琉球国使節のみであった。文人や識者は別として、街道の人々には国の違いは判別しがたく、多くの見物人はこの行列を「異国」「唐人」として理解したのである。

3. 「登城行列」を描いた肉筆の絵巻

一巻もしくは二巻仕立てのもので、先導する薩摩藩士に伴われて行列する琉球国使節が「御用絵師」によって描かれている。正使・副使をはじめ使者たちは、異国風（唐・琉球）の衣装をまとい、目を引く唐風の持道具を携え、路次楽（銅鑼・両班・銅角・喇叭・唄）を奏でながら道行く。前後を警護する薩摩藩士の行列姿が、装束の詳細、姓名とともに丁寧に記され、琉球楽器の詳細が描かれたものもある。これらは、使者の行列の構成、順次、装束、持ち道具などを正確に書き残すことが目的で、幕府にとっての「記録」を意味している。

現時点で確認されている行列絵巻は11点で、寛文11年（1671）を最初に、宝永7年（1710）、明和元年（1764）、寛政2年（1790）度のものである。他の年度にも作成されたと考えられ、それら同系統の絵巻の確認が望まれる。

琉球国使節行列絵巻一覧

1	寛文 11 年 (1671)	琉球使者金武王子出仕之行列	1 巻	ハワイ大学宝玲文庫
2	宝永 7 年 (1710)	宝永七年寅歳十一月十八日琉球中山王両使者登城行列	2 巻	ハワイ大学宝玲文庫
3	宝永 7 年 (1710)	宝永七年寅歳十一月十八日琉球中山王両使者登城行列	2 巻	国立公文書館内閣文庫
4	宝永 7 年 (1710)	中山王来朝図 cf. 宝永七寅歳	2 巻	国立公文書館内閣文庫
5	宝永 7 年 (1710)	琉球中山王両使者登城之行列絵巻 (狩野春湖)	2 巻	大英博物館
6	宝永 7 年 (1710)	琉球使節絵巻	1 巻	福岡市博物館
7	宝永 7 年 (1710)	琉球人行列図	1 帖	東京大学史料編纂所
8	宝永 7 年 (1710)	琉球人登城行列 cf. 琉球人道路樂器圖も所蔵	2 巻	BYU 図書館
9	明和元年 (1764)	琉球中山王使者登城行列図	2 巻	沖縄県立博物館・美術館
10	不明 (ND)	琉球人行列絵巻	1 巻	沖縄県立博物館・美術館
11	寛政 2 年 (1790)	琉球使節道中絵巻	1 巻	国立歴史民俗博物館

このほかに、「町絵師」や画才の手になる行列絵巻や挿絵本が残されており、行列の姿とともにこれを迎える市街の構えや見物人の様子も表情豊かに描かれたものもある。この「絵引」の底本となったものもこれに類する。

宝永 7 年度の行列絵巻に類似したものが複数ある。すなわち、内閣文庫 (2 種)、ハワイ大学「坂巻・宝玲文庫」、大英博物館、米国 Brigham Young University (BYU) 大学に所蔵されている。とりわけ大英博物館のものには、巻末に狩野春湖の名が記され、これらの絵巻物としては最も上質である。残念なことに修復の際に錯簡が生じており、行列の順序が乱れている。再修復されることが望まれる。それぞれ描き方に差はあるが、宝玲文庫本と内閣文庫本、BYU 本の特徴は極めて似ている。

4. 行列姿を描いた刊行物

「来朝図」「行列図」「行列附」「大行列記」「行粧記」と題するものである。一枚物から二～三枚組、冊子形態など、多様な単色墨摺りの行列図である。また、彩色された錦絵の組仕立てのものもある。多くは、行列姿や持道具を主題としたもので、渡来年度や使者名が添えられている。また、琉球の歴史や「琉球言葉」が記載されているものもある。これらは、渡来の時期に合わせ、事前に版行免許を得て路上や書店で販売された。行列人気を見込んだ「商品」で、読者の興味・関心に応えた主題となっている。宝永 7 年 (1710) 度をはじめとして、寛延元年度から渡来年度ごとに売り出されているが、天保 3 年 (1832) 度が最も多い。当時の出版文化の興隆や市民の異国への興味が反映されたものである。

冊子形態に比べて一枚もしくは複数の摺り物は、書物ではないので史料として残りにくい。人々の手から手へと渡るうちに、散けたり紛失が生じる。特に錦絵仕立ての複数枚の組物は、人気の箇所が珍重される。それ故に、これらを糊付けして繋ぎ、巻物仕立てとして保存したものもある。また、販売当初は題簽袋を伴っていたものも、多くは袋が失われた。行列の次第を描いた「御免琉球人行列附」(寛政 8 年度・江戸本芝の三河屋半兵衛・清水屋治兵衛) の題簽袋は、涼傘・旗・銅角を朱摺りに描き、中央に「琉球人行列番附」とある⁽¹⁾。

人気を当て込んで、錦絵形式と同時に廉価版の墨摺りを売り出した版元もあった。天保 3 年に江戸芝神明前の丸屋甚八は「琉球人参府之図」(錦絵三枚組) と「御免琉球人行列附」(墨摺三枚組) を同時期に刊行している⁽²⁾。

5. 子供の絵双六に描かれた行列

「双六遊び」が庶民の遊びとして広まったのは、浮世絵版行の普及や町人文化、出版文化の興隆があった江戸中期以降である。大判の彩色図版を目の前に、サイコロの出た目に従って駒を進める。いわば「出たところ勝負」の展開は人生を模し、「成仏」「出世」「人の生涯」などの「願望」と「論し」を含んでいる。その時々々の世上の関心ごとが題材となった。豊穡の地としての「竜宮」への関心は古くからあり、『太平記』には依藤太秀郷が「瀬田の唐橋」から竜宮に向かうという話がある。人々の中に「琉球」が意識されるようになると、これを「竜宮」に重ねる話が生まれた。また、江戸後期には水芸などの見世物に「竜宮」が見せ場となり、竜宮へ関心が集まった⁽³⁾。『新板龍宮飛廻双六』（京都吉野家勘兵衛刊、寿岳章子旧蔵、京都府立大学図書館蔵）では、鯛や平目などの魚類と戦いながら駒を進め、竜宮城にたどり着き、乙姫に迎えられるという筋立てとなっている。その後、「琉球人行列」の人気を捉えて、竜宮話を組み込んだ双六『大新板りうくう人行列飛廻双六』（竜宮・琉球）【図1】が、同じく京都の版元から出され、さらに琉球人の行列姿を描きながらも「唐人」として『新板唐人祭礼飛廻双六』【図2】が刊行された。

【図1】「大新板りうくう人行列飛廻双六」（沖縄県立博物館・美術館蔵）

板元京新町通丸太町上ル丁 金屋新兵衛 彩色一枚摺

これは、上下の四段に分かれ、右下の「此所ふりはじめ」から始まり、¹⁾「がく童子」²⁾「こしやう」（小姓）³⁾「わかしゆ」（若衆）⁴⁾「ふはいの玉」（面向不背の玉）⁵⁾「たま引」⁶⁾「ぎゑしやう」（儀衛正）⁷⁾「りう王」（龍王）⁸⁾「さんぎくわん」（讃儀官）⁹⁾「つりかね」¹⁰⁾「依藤太」¹¹⁾「とらはた」（虎旗）¹²⁾「さんすくわん」（三司官）¹³⁾「がつき箱」（楽器箱）¹⁴⁾「がくじん」（楽人）¹⁵⁾「はりはた」（張旗）と進み、「上り龍宮城」に至る。当時、流行った「龍宮話」に琉球人の行列姿を描いた双六である。

【図2】「新板唐人祭礼飛廻双六」（大阪歴史博物館蔵）

刊記不明 一枚摺

嘉永3年（1850）度の琉球人行列を双六に仕立てたもの。同様に四段右下から、「ふりはじめ えぞうしうり」（絵草紙売）から始まり、¹⁾「町々ぢきやうづき」（地形突）²⁾「屋根みがき」³⁾「ぎやうれつ」⁴⁾「ぞう長持」⁵⁾「下官」⁶⁾「書翰長持」⁷⁾「鞭 せいはい竹也」⁸⁾「牌 おもてうら」⁹⁾「張旗」¹⁰⁾「路楽」¹¹⁾「虎旗」¹²⁾「冷傘」¹³⁾「山王御輿」¹⁴⁾「副使澤岷親方」¹⁵⁾「楽童子 里のしといふ」¹⁶⁾「惣押 御家臣」と進み、「上がりの駒」には「玉川王子泊」の宿札がある。「唐人」としているが、「虎旗」「楽童子」「玉川王子」とあることから、これが本絵引にも描かれた嘉永3年度の琉球国使節を描いたものであることが知られる。

【注】

- (1) ハワイ大学宝玲文庫蔵。
- (2) 前者、UC.Berkeley 三井文庫蔵。後者、ハワイ大学宝玲文庫蔵。
- (3) 「[生人形] 引札」「来ル四月中旬より両国回向院ニおいて興行」、「柳川一蝶斎手妻番附」。共に『近世・近代風俗史料貼込帖』（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館蔵）。

【参考文献】

- 横山學 1981『江戸期琉球物資料集覧』宝玲叢刊第4集 本邦書籍
横山學 1985「江戸の琉球人」『江戸の庶民と社会』吉川弘文館
横山學 1987『琉球国使節渡来の研究』吉川弘文館
横山學 2001「琉球国使節の渡来と琉球物刊本」『琉球使節展』豊橋市二川宿本陣資料館
横山學 2006「琉球国使節の往来」『知られざる琉球使節 国際都市・鞆の浦』福山市鞆の浦歴史民俗資料館
横山學 2011「琉球使節がやって来る」『特別展 琉球使節の江戸上り』たつの市教育委員会
横山學 2015「琉球国使節登城行列絵巻を読む」久留島浩編『描かれた行列—武士・異国・祭礼』東京大学出版会

